

仏典を読む(六)

『維摩經』の無住の心

船木満洲夫

禅宗六祖の慧能は幼くして父を失い、貧乏な身で薪を町で売り歩いていたある日、旅の者が『金剛經』を読んでいるのを聞いてすぐに悟ったと、『六祖壇經』に書いている。その『金剛經』は、「私という觀念、衆生という觀念、命あるものという觀念、個我という觀念」の生じてはならぬことを繰り返して強調するとともに、「応に住する所なくしてその心を生ずべし」と説いている。執着のない無住の心という教えは『維摩經』に継がれ、さらには

『菩提達摩無心論』から、『六祖壇經』へと流れて禅宗の根幹を決定づけたのであった。『維摩經』を筆者が読もうという気になった主な動機は、『六祖壇經』との関連にある。仏陀は説く、「直心はこれ菩薩の淨土なり」、そして「もし菩薩淨土を得んと欲せば、まさにその心を淨くすべし、その心の淨きに随つてすなわち仏土も淨かるべし」(仏國品)と。仏國土を淨めるには直心、つまり素直な心、あたりまえの心でなければならぬのであり、そして「心淨ければ仏土淨し」の教えが示されるのである。『六祖壇經』では一行三昧について、「行住坐臥の姿勢を通して、いつでも素直な心でいること」だとし、一方「悟った人は自分で心を淨める」と言う。心を淨くする眼目は自我をなくすことであろう。「マタイ伝」の「幸いなるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり……幸いなるかな、心の清き者、その人は神を見ん」と比べると、『維摩經』の表現は淨土実現への直接性に含蓄があるように思われる。

ついでながらエックハルトは心の貧しき者に関して、「何も意志せず、何も知らず、何も持たない人」のことだと解している。この神秘主義哲学者の無の思想、唯一の絶対者の考え方は、大乘仏教の空の思想と不思議に近似性があるようだが、どなたかに教示を仰ぎたい。

維摩は説く、「煩惱を断ぜずして涅槃に入る、これを宴坐となす」(弟子品・舍利弗章)と。ここは坐禅のあるべき姿を説いた興味ある個所であり、「三界において身意を現ぜざる、これを宴坐となす」から始まって、「心内に住せず、また外に在らず、これを宴坐となす」とも述べたあと、右のように迷いを断ち切らないままで悟りの境地に入ることを説くのである。「六祖壇經」になると、「迷いこそ悟りにほかならん」とし、そして有名な坐禅の定義だが、「外にあらゆる存在に対して、心の起こらぬのが坐であり、本性にめぐめて乱れぬのが禅である」とされる。維摩の「煩惱を断ぜずして」云々の句は、否定を容れないがらの内面止揚の点で捨て難い言葉だと思う。

維摩は文殊に答える、「無住の本より一切法を立つ」(觀衆生品)と。あらゆる存在はよるべき基底がないのである、これは『金剛經』の「応無所住而生其心」に通う句。『六祖壇經』では「われわれの法門は昔からすべて、無念ということをおしたてて宗旨とし、無相を主体とし、無住を基本としてきている」と言い、「無住とは人間の本性のことである」と説いている。思い出すのは一休が、無相の虚空からあらゆるものは生じると教えたこと。この風狂の禪者は十二歳のとき、お寺で『維摩經』を講ずるのを大衆とともにきいて、人々にその将来を畏れられた

と伝えられる。一休の禪風は『維摩經』の一つの展開と見るべきか。

次に維摩の「黙として知られる個所(入不二法門品)」に移る。不二の法門に入るとはどういうことかとの維摩の質問に、菩薩たちがそれぞれ答えたあと、文殊が維摩自身に同じことを問うのである。それに対して、「時に維摩詰黙然として言なし」と書かれている。沈黙で示したのである。真に不二の法門に入るのに文字も言葉もないというのは、仏陀の「四十五年一字不説」に、そして禅宗の「不立文字」教外別伝」に通じることだが、維摩の沈黙は何ともアイロニーが濃い。キルケゴールの言え「アイロニーは無限に沈黙するのであろうか。全体的に『維摩經』の対話には、無住という根底からアイロニーが放散している。

維摩は仏陀の質問に答える、「自ら身の実相を觀するが如し、仏を觀するもまた然り」(見阿閼仏品)と。仏を觀することは自分の本来の姿を觀ることであり、「觀ないことによつて觀る」とも訳される。字数が付きしたが先に触れた一休は、仏を外に求めるのを戒めるとともに、「心とはいかなるものをいふやらん、すみ絵にかきし松風の音」と歌つたのであつた。ちなみに維摩は在家の居士であつた。

(ふなきき ますお 文学部教授)